

fl. Erg. bd. IV. (以上桜井博士の原文のまま)となっており、桜井博士の創定された種類ではない。故此の場合の non Schwaegr. の意味は以前に使われていた様式に従ったものであり、其の意味は「桜井博士が植物学雑誌中に日本産を報ぜられた植物は *P. cucullata* であつて *B. erythrocarpum* Schwaegr. ではない。桜井博士が *B. erythrocarpum* Schwagr. に当てられたのは同定違いである」との意見によつて書かれたものと推察する。それならば次の如き仕方にすれば誤解を招かぬであらう：

***Pohlia cucullata* (Schwaegr.) Bruch—*Bryum erythrocarpum* Schwaegr. sensu Sakurai in Bot. Mag. Tokyo 66: 162 (1953).**

又は — *Bryum erythrocarpum* Schwaegr.: Sakurai in Bot. Mag. Tokyo 66: 162 (1953).

(2) *Grimmia mollis* Bryol. eur. fasc. 42, 1 (1849)

これは古くから慣用された引用法ではあるが著者名が来るべき位置に書名が来ている訳であり、正確な引用とは言ひ難い。故に長くなつても次の如く引く方が良い：

***G. mollis* Bruch, Schimp. et Gümb., Bryol. eur. fasc. 42, 1 (1849)**

□ Seidel, Käthe: **Die Flechtbinse, *Scirpus lacustris* L., Oekologie, Morphologie und Entwicklung, ihre Stellung bei den Völkern und ihre wirtschaftliche Bedeutung.** Die Binnengewässer, 21 (1955) XV+216 S, 42 Abb. in Text und auf 1 Beilage, einem Titelbild. E. Schweizerbart'sche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart. DM. 39.00.

Flechtbinse は編みいぐさ(藺草)とでもいふべきか、フトイの類である。その形態、發育、生態などを精しく研究し、またこの植物があらゆる民族の生活と如何なる交渉をもっているかを丹念にしらべ、その意義を明らかにしている。本書は全篇を3部に分ち、その一は陸水の、その二は汽水および鹹水域の Flechtbinse、その三は民族と Flechtbinse となつている。第1部では、まずこの植物の群落学的観察からはじまり、進んでその体の各部の成長の形態解剖学的な精しい研究がまとめてある。特に莖は最も綿密にしらべてある。体の各部の成長は生育地の水深に伴つて著しい差があり、このことは湖沼の沿岸帯におけるこの植物の生育密度と生産とに大きい関係がある。季節的には莖が最も伸びる最盛期は9月までである。次に、この植物の牧草としての栄養価値、編み草としての強韌度などの研究を述べている。牧草として優秀と考えられるが、動物が到達できない水の深さまで生えるので、家畜による利用率は小さい。また、セルローズに富むのでパルプ原料として役立つことを指摘している。マツトその他の編物の材料としての、莖の強韌度はその生育地によつて大いに異なる。

第2部では、*S. lacustris* の汽水および鹹水生育地についての比較研究を収め、この部分が最も陸水学的である。その調査地域は北欧が主になつているが、一部南仏にも及んでいる。

第3部は、各民族における Flechtbinse の利用について、著者の経験および文献上の研究によつて述べている。この植物が自然状態でよく湖沼の護岸に役立ち、荒蕪地の利用上、または泥炭地の改良に有用であり、あるいは家畜の飼料として、編物細工の原料として更にまたパルプ原料として利用せられていることは、著者の集めた材料によつてよくわかる。南米 Titicaca 湖の草編み舟はその最も特異な利用例である。巻末に文献 398 編をあげてある。12 頁にわたるくわしい索引を附す。(上野益三)